

J.S.ミルの功利主義における感情の役割について

佐野 梓*

On the Role of the Feelings in J.S.Mill's Utilitarianism

SANO Azusa

Abstract

The purpose of this paper is to show that our feelings and moral sentiments play an important part in Mill's Utilitarianism. Mill's utilitarianism is significantly different from that of Bentham in some respects. Mill notices the variety of quality in pleasures. He associated the ideas of freedom and justice with utilitarianism.

Often, human feelings are regarded as something which disturbs the function of reason, but Mill did not think that way. According to Mill, the feelings are indispensable to cultivate morality and virtue, and both are needed to our happy. In utilitarianism, the feelings function as internal sanction and a force which supports the notion of justice.

We can see from these that his utilitarianism is not only built upon utility only, but based on various feelings, particularly, fully cultivated and fertile sentiments.

What Mill emphasizes in his utilitarianism is not 'happiness' mechanically estimated by the hedonic calculus but a variety of diverse happiness which would satisfy fully cultivated and fertile sentiments of each individual.

From Mill's point, people should aim their proper happiness which varies from person to person, and the qualitative variety of pleasure and other feelings are indispensable to the variety of one's own happiness.

Keywords: J.S. Mill, Utilitarianism, feelings, justice, happiness

はじめに

J.S.ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) はJ.ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) の提唱した功利主義の擁護者として知られるが、彼の功利主義論はベンサムを代表とする古典的な功利主義とは根本的に異なったものである¹。人間の快樂にベンサムの考慮しなかった「質」という価値基準を用いたことや、功利主義と自由や正義という観念を結びつけたこと等が彼の功利主義を他のそれと一線を画すものとして挙げられるが、もう一つ、ミルの功利主義の独自性を特徴付けるものとして、彼がその道徳論の中に「感情」を重要なタームとして考えていることが挙げられる。個人の感情を重要視するということは、一見功利主義からはもっとも遠いもののように見えがちである。「最大多数の最大幸福」を目指す功利主義にとっては、「どういった行為がこの場においてより多くの快、ひいては幸福を結果としてもたらすか」ということが目指されるべきであり、結果としてより多くの快を生み出す行為がもっとも善であるとされる。ここで必要とされるのは正確な快樂計算を行える理性や判

キーワード：J.S.ミル 功利主義論 感情 正義 幸福

*平成22年度生 比較社会文化学専攻

断力であり、感情ではないと考えられてきた。

功利主義者は人を冷酷で非情にするとか、他者に対する道徳感情を削ぐとか、行為の結果を冷淡で無情に検討することのみ関心を向けさせ、そうした行為を生じさせた資質を道徳的に評価させないということがしばしば主張される。² (Mill, 1861, p.291)

ミルはこのように功利主義に対する批判があることを認めながら、これに反論する。質の高い快を求めるためにも、功利原理によって定められた規範を守るためにも、また、何より個人の幸福の実現のためにも感情は欠かせないものだと主張するのである。

そもそも人間の感情というものは、受動的でありしばしばコントロールが難しい点などにより、多くの哲学者によって人間の本性である理性と対置する動物的なものであり、人間の理性的な働きを損ねるものであるとして扱われ、これをいかに抑えコントロールするかが課題であるとされてきた。だがミルは感情をそのようなネガティブなものとしては扱わない。感情を豊かにすることは決して理性の働きの邪魔にはならず、むしろ感情を陶冶し豊かにすることによって初めて人はより質の高い快や幸福を求められるのだという。そのためミルの功利主義において、最大幸福のためには感情の働きが欠かせないものとして存在するのである。

では、このような重要なタームとして扱われる感情はミルにとってどのように理解されているのだろうか。そしてそれは彼の功利主義を中心とする思想の中で、どのような働きをするのだろうか。以上のことを検討することによってミルが功利主義を唱える中で目指した幸福の姿を明らかにしていきたい。

ミルにとっての感情

これらのことを検討するためにまず、ミルの感情理解を掘り下げていきたい。先にも述べた通り、多くの思想家によって感情は理性の働きを妨げるものであると考えられてきた。特にミルと同時代に生きたイギリス文化人の中ではその傾向が顕著であったという。ミルの周りの学識ある人々もその例外ではなく、彼の父や友人も感情を育てることは幻影を育てるようなものであると誤解し、感情をとぎすますどころかなるべく抑えるよう努めてきたと、彼は強く非難する。夕日に照らされた雲の美しさを強烈に感じる事が、雲が水蒸気であることやその物理的性質を理解するのに全く妨げにならないように、感受性や感情は理性的な理解を何ら邪魔はししないとミルは言う。そのような誤解がしばしば生じるのは、感情が強く豊かであることと、それに対する抑制力が弱いというまったく違うことが混同されているからではないだろうか。ミルは強い感情を持つことがすなわち自身の感情をコントロール不能のものにするわけではないということを強く主張する。

ある人の欲求や感情が他の人より強く多様だということは単に、その人が人間性の素材を豊富に持っているということに過ぎない。従って、おそらく悪事をはたらく力も強いのだろうが、良いことを行う力もたしかに強いのである。強い衝動とは、活力を言い換えたものにすぎない。活力は悪いことに使われるかもしれないが、無気力で無感動な人より活力のある人の方がつねに、より多くの良いことを行えるだろう。自然な感情が強い人は、洗練された感情も強く発展させ得る。強い感受性は個人の衝動を活発で強力なものにするが、それは同時に、美德を熱烈に愛する気持ちと厳格に自分を律する自制心を生む源泉となる。(Mill, 1859, p.124)

感情の陶冶をもって自身の感情や衝動を育てるということは、同時に自制心や共感の能力をも育てるのだとミルは言う。自身の望むものを感じ取るための感情や欲求を育てることも、他者の望むものを感じとり尊重するための共感能力を育てることも、最大幸福の実現のためには欠かせないものである。そのため彼は、自身が内的教養と呼ぶ感情や感受性の涵養を非常に重要視していたのである。

ミルの周りの多くの人にとって感情は理性の判断を邪魔するものだとされてきたが、ミルにとって感情とはむしろ、全ての判断の基礎となるものであったと言える³。そもそも、他者に対する根本的な態度を決定付けるものは感情である。食べ物の腐った臭いに不快感を感じ、危険に対して恐怖を感じることで、人は知識がなくとも正確な判断のもと自身の身を守ることができる。そしてそのあまりに動物本能的な働きが理性と相反するものだと考えられる大きな要因なのであろう。しかし理性的な判断にも感情の働きは不可欠である。自分にとってより良いものを選ぶときには、自分が何を好むのか、何を望むのかという好き嫌いや快不快等の感情が大きな役割を

占めており、対象についての知識がそのまま選択に繋がる訳ではない。人間はそれぞれ個性のある生き物であり、個人の幸福はその個性にそって多様であるというのがミルの幸福論の中心にある主張である。したがって、自分が何を望むのかという感情をまったく抜きにして、何をすべきであるかというような理性的判断や他者の意向のみで人生を作りあげることが、その人にとっての幸福には繋がらないとミルは言うのである。実際、強い感情を「狂気的一种だ」と軽蔑する傾向にある父のもとで育った少年時代のミルは、父の望むように知識だけを人一倍詰め込むばかりで感情を十分に育めず、意志という帆がないまま出航した船のようであったと言う⁴。結果としてその達成が自分の幸福であると信じていた人生の目標に、自身の欲望や感情がまったく伴わないという事実と直面してしまったミルは生き甲斐を見失い、抑鬱状態に陥るのである。この経験からミルは、幸福は自らの意志で強く望むものでないといけないこと、そして自分の意志で何かを望むためには、知識や分析力だけでなく感情や感受性を育む必要があるということを痛感するのである。

感情の陶冶は以上のように個人の幸福にとって不可欠なものであるが、それだけではなく全体の幸福にも大きく寄与する。「何が正しい行為なのかを決める功利主義的基準を構成している幸福とは、行為者自身の幸福ではなく関係者すべての幸福である。」(Mill, 1861, p.279) という言葉の通り、ミルが功利主義や自由論を著す上で念頭においていたのは常に、他者と共存しながら生きる人間の姿である。人は社会的な生き物であり、多くの他者と共に生きていく必要がある。その上で、共に生きる他者とどのようにしてより良く共存していくかを考えており、人と人との関係性が重視されている。したがって人は、自身の幸福にだけ目を向ければ良いわけではなく、他者の幸福にも目を向ける必要があることをミルは主張する。

誠実さに向かう豊かな感情を自らの内に涵養することは、私たちの行為が手段となりうるもののもっとも有用なものの一つであり、この感情を弱めることはもっとも有害なものの一つである (Mill, 1861, p.294)

このような記述からも、ミルが自己と他者を結びつける「絆」を構成する重要な要素が感情であると考えていることがわかるだろう。自己犠牲の精神も、それが他者の幸福をより増大させるためであるならそれは功利原理に適っているとミルは言う。そして、人が自分以外の人間の幸福を望むためには、共感の感情や社会的感情を育てる必要があるというのである。

功利主義における感情の働き

以上のようにミルにとって、感情とは個人の、そして全体の幸福にとって欠かすことのできない非常に重要なファクターである。ミルの功利主義は最大幸福を目指すものであるので、当然幸福に欠かせないという点だけでも、感情、そして感情の陶冶は彼の功利主義において重要な働きをするということがわかる。しかしミルにとって感情とは、ただ幸福に寄与するだけのものではない。それによって個性を育み、人格の根幹を成すものとして考えられ、様々な形をもって功利主義の骨子を支えているのである。

1) 快の質

ミルの功利主義はその他多くの功利主義と同じように、最大幸福を究極目的とするものであるが、彼の考える最大幸福には、ただ快が多いという量的な尺度だけではなく、より高次で良質な快を得るべきであるという質的な尺度が取り入れられた⁵。

ある種の快樂が他の快樂に比べてより望ましく価値があるということを事実だと認めることは、功利原理と完全に両立しうる。他のあらゆるものの評価においてはその質も量と同じように考慮されているのに、快樂の評価は量によってのみで決められなければならないというのは不合理なことである。(Mill, 1861, p.279)

このように快に質を見出したことは、ミルの功利主義をベンサムをはじめとする他の功利主義とはっきりと区別する大きな特徴である。ミルはこのことによって、快樂を目的とするあらゆる思想を下等だと見なす批判者に反論する。曰く、快樂主義は下等であり豚にのみふさわしい教義であるという批判は、人間が下等な快しか得られないとの想定の上に立っているが、実際はそうではないからこそ、この批判が起こるのだ、と。もし人間と獣の快樂の源泉が全く同じであるのなら、獣にとっての良い生は人間にもそのまま当てはまるであろうが、実際は獣

の快樂では人間の幸福の構想は満たせない。だからこそ、快樂主義が人間の品位を下げるように感じられるのである。すなわち、人間は動物よりも高尚な能力をもっておりその能力によってより高次の快樂を望み、手にすることができる。そしてそれをもってして自身の幸福を成すのであるから、快を求めることがすなわち獣のような生を生きることではないというのである。

では、快に質があり、人間は獣の快樂よりも高次の快樂を得られるとして、その質の差はどのようなものであって、どのようにして計られるものなのであろうか。

快樂の質の違いということは何を意味しているのか、もしくは、量的に多いということを利用して、快樂そのものとしてある快樂が他の快樂よりも価値があるとされるのは何によるのかと尋ねられたら、答えは一つしかない。二つの快樂のうち、もしどちらをも経験した人の全てあるいはほとんど全てがどのような道徳的義務の感情とも関わりなくはっきりと選ぶとるものがあるとすれば、それがより望ましい快樂である。

(Mill, 1861, p.279)

高次の快と低次の快のどちらもをよく知っている人（の多く）が迷わず選ぶ方が高次の快である。⁶ 「獣の快樂をふんだんに得ることが約束されたからといって、何らかの下等生物に生まれ変わることを了承する人間はほとんどいない」ように、高次の快樂と低次の快樂のどちらも知る人が高次のものを選び取るのは疑いようがない事実であるとミルは言う。併せて、そういった高等な快は得てして低次の快よりも得難いものであると主張する。

より高い能力を持つ者は劣っている者より、幸福になるために多くのものを必要とするし、おそらくより多くの点でより強く苦痛を感じやすいだろう。(Mill, 1861, p.280)

快樂を感じる能力の低い者はそれを十分に満足させる機会に恵まれているが、高い能力を持つ者は、自分の求めうる幸福は全て、今あるこの世界においては不完全なものであると常に感じていることは疑う余地のないことである。(Mill, 1861, p.281)

獣の快、たとえば満腹であるとか安眠のような快より、学問や芸術に関するより人間らしい快の方が得難いように、低次の快より高次の快の方が得難い。しかしそうであるにも関わらず、高等な能力を持つものは、より高次でそのため手に入り難い快を望む。たとえそれを得るために少なからず苦勞をすると知っていても、である。快の質とはそれがわかる者にとってみれば、それほどまでに明らかなものであると言う。逆に言うと、高次の快を望むには高等な能力が必要なのだと言える。

では、人に高次の快を選択させる能力とは、一体何であるのだろうか。「ある特定の快樂が、ある特定の苦痛を受けてでも獲得する価値があるかどうかを決めるものは、経験者の感情と判断力の他にあらうか」(Mill, 1861, p.282)とミルは断じる。そして、人は自身の感情にとって快いものを選択していくため、感情の陶冶が欠かせないことを強く主張する。感情を、感受性を、その他様々な人間の能力を十分に育ててこそ、人はより高い質の快を求めることができるからである。ミルの功利主義はより質の高い快をより多く得ることがその究極目的に繋がっている。したがって、感情を陶冶させること、そしてその高度な感情を上手く働かせることが非常に重要になってくるのである。

2) 内的強制力としての感情

功利主義における感情の大きな役割のひとつとして、「内的強制力としての感情」があげられる。ここで言う強制力とは、人が義務を行うよう（義務に反したことを行わないよう）強制される力のことで、実際的な罰であったり他者からの批判であったりという外的強制力に対して、自分の中から生まれる拘束力のことを内的強制力と呼ぶ。

義務の内的強制力とは、義務の基準が何であったとしても同じただ一つのもの、つまり私たちの心の中にある感情である。それは義務に反した際に感じる、程度の差はあるが激しい苦痛であり、〔中略〕この感情が利害を離れて純粋な義務の観念に結びつけられるとき、良心の本質的要素となる。〔中略〕これらの連想は、共感から、愛から、また特に恐怖からくる。各種の宗教感情や、幼少期やこれまでの人生の記憶からもくる。更に、自尊心や、他人に尊敬されたいという欲求からくるし、また時には自己卑下からもくるのである。こういった極度に複雑な関係性が、〔道徳的義務の観念を〕神秘的な性格を帯びたものにするように思われる。

(Mill, 1861, p.300)

このように、その他多くの道徳理論と同じように、功利主義においても良心と呼ばれるような道徳感情が内的強制力となるのだとミルは言う。ただ、良心を形作る過程において様々な感情が絡み合うために、その複雑さが良心を神秘的なものであると誤解させてしまうことがしばしば起こりうるのである。また、道徳義務の中に客観的実在を見出す方が、その強制力が主観的（感情）であるよりも従いやすいという意見に対してミルは「人を本当に駆り立てる力は、その人自身の主観的感情である」（Mill, 1861, p.301）と反論するのである。

ミルは明らかにそれを持たない人も存在するという点もふまえ、このような道徳感情を後天的なものであると考えていたが、話すこと、推論することをはじめとする人間的活動に関わる能力の多くと同じように、生まれもってはできないが人間にとってごく自然なことであるとした。つまり、わずかではあるが自然発生的に生じ、涵養によって大きく伸ばすことができるという。しかしこれは、幼少期から教育を巧みに使っていけば、どのような不合理な方向にでも涵養することができるという危険を孕んでいる。ただ、まったく人工的な道徳的連想は知的涵養が進むにつれて分析のもつ分解力によって崩壊されていくであろうとミルは言う。そのため、もし功利主義と道徳感情の結びつきが恣意的なものであり、この結びつきを快適だと感じ育てたいと思うような感情という自然な基礎がなければ、功利主義もどんなに深く教え込まれてもいずれ分解されるものなのである。

しかし、この強力で自然な感情という基礎は存在する。そしてそれは、一度でも全体の幸福が倫理の基準として認められれば、功利主義道徳論の強みとなる。この確固たる基礎とは、人類の社会的感情という基礎のことである。(Mill, 1861, p.303)

ここでいう社会的感情とは、「同胞と一体化したいという欲求」であるという。自分の所属する人間社会の成員たる同胞との連帯感や利害の一致を望む感情のことで、これが完全になると、自分に得であることでも同胞にとってそうでないことは望みもしなくなり、同胞同士での利害の衝突等は起こらなくなるのであるという。当然、現状では人々がこういった完全な共感を抱き利害の衝突が起きないということはあるにせよ、そういった状態になる見込みもない。しかし、人間にとって社会は既に自然かつ必要なものであり、よほど例外的な状況にない限りは自分がその成員でないと考えることはないであろうし、社会の一員である以上他者の利益を全く考えずに生きていくことはできないであろう。また既に、社会的感情の強い人は同胞を自分と利益を奪い合うような競争相手とは考えず、挫折を願うようなこともないという。多くの人がこのように他者の善に意識を向けられている訳ではないが、この感情は社会が発展するにつれ強まっていくとミルは主張する。

たとえある人がその人自身の中にこの〔他者の善に向かうような〕感情を少しも持たないとしても、彼は他者がこのような感情を持つことによって他の人と同じように大きな利益を受ける。そのため、この感情のごくわずかな兆しが共感による感化や教育の影響によって獲得され育まれる。(Mill, 1861, p.305)

他者がこの感情を持っていることで周囲が利益を受けるため、「人は利害関心と共感というもっとも強い動機によって、この感情を示すよう、そして力のかぎり他者のこの感情を促すように駆り立てられる」（Mill, 1861, p.304）というのがミルの主張である。

多くの人にとってこの〔社会的〕感情はその人の利己的感情よりも弱く、しばしば完全に欠けている人も存在する。しかし、この感情を持っている人々にとって、それは自然な感情が持つ特徴の全てを備えている。この感情は、そのような人の心に教育による迷信や社会的権力に無理強いされた専制的な法としてではなく、彼らにとってなくてはならない属性として存在している。この確信が最大幸福道徳論の究極的強制力である。そしてこれこそが、感情が十分に発達している人の精神を、私が外的強制力と呼んだものによって与えられた他者への配慮という外的動機に反することなく、それとともに働かせるものである。(Mill, 1861, p.306)

このように、社会的感情に支えられる内的強制力という感情が、功利主義が実践される上で不可欠な働きをする。ここでミルが想定していたのは常に、他者と共存して生きていく、社会的存在としての人間である。その中で目指したのは社会の成員として、よりよく他者と協力し共存していく人の姿であり、したがって彼の主張する道徳律においては常に他者の存在が念頭に置かれており、個人の中で完結するものではないのである。

3) 正義の感情

ミルの功利主義を特徴付けている点のひとつとして、一般功利性から正義を導出するという大胆な試みを行っているという点があげられる。ミルは正義の観念について以下のように言う。

思索の行われるいつの時代においても、功利性もしくは幸福が正・不正の基準であるという理論が受け入れることのもっとも大きな障害の一つは、正義の観念からきている。正義という言葉が、生来のもののような素早さと確実さで呼びおこす強力な感情と明白な知覚が、多数の思想家にそのものの生得的な性質を示すものだと考えられてきたし、〔中略〕一般的にどのような種類の便宜ともはつきり異なり、（一般に認められているように）長い目で見れば事実上は便宜性から切り離せないが、観念上は便宜性とは対立するものと考えられてきた。（Mill, 1861, p.314）

正義という主観的な精神上的感情は、単なる便宜（に一般的に伴っている感情）とは異なっているし、後者の感情の極端な場合を別にすれば、より定言的な形で求められるものであるから、人々は正義が一般的功利性の特殊なものであるということやその一分野にすぎないということに気づきにくいし、正義の感情がもっている強い拘束力はまったく別の起源をもっているに違いないと考えている。（Mill, 1861, p.313）

正義の観念はそれが引き起こすあまりにも強い感情のせいで、「正義」という「便宜Expediency：（皆にとって都合のよいこと、適切性）」などとは起源を異にする客観的実在が存在すると思われ、絶対的なものとして神聖視されてきた。このことが功利が道徳規準であることの一歩の妨げになっているが、これは誤った議論であるとミルは考えた。そこでミルは正義に伴う強い感情を精査し、ある行動の正義・不正義という性質は本質的に特別なもので、その行為の持つ他のあらゆる性質と区別されるものなのかを明らかにしようとする。そのために正義の示す範囲を明らかにしようと、様々な正・不正の場面を想定し、これを便宜・道徳・正義の三つに区分した⁷。まずその行為（または行為をしなかったこと）がどのような形であれ罰せられるべきかどうかという点でひとつの線引きをし、罰せられるべき行為、すなわち強制させてでも従わせなければならない行為を義務とし、その行為は道徳一般に関わる範囲のものであるとして、そうではないどんなにその通りにふるまって欲しいと思っても強制に値しない単なる便宜と区別した。そして義務と呼ばれる行為を、行為自体は拘束的であってもいつ、どのように行うかという個々の機会が定められていない「不完全な拘束力を持つ義務」⁸と、いつ誰に対してそれを行わなければならないかがはっきりとしている「完全な拘束力を持つ義務」とに区分し、後者を正義としたのである。道徳と正義の違いはこの拘束力の違いであるが、この違いは行為の対象にその行為を受けるべき権利があるかどうかという点から生じるものである。たとえば恩恵や慈善といったものは行う側には義務であるが、それを受ける者に当然それを受けるべき権利があるわけではない。これに対して人を害してはならない、奪ってはならないといった義務は、その行為の受け手に社会によって守られるべき権利が存在するのである。この違いが、道徳と正義の観念を分けるものである。では、この道徳と正義を区別するものである権利を、ミルはどのようなものであると認識していたのであろうか。

権利を持っているということは、それを所有したときに社会がその人〔に対してその所有〕を保護しなければならないものを持つことであると思われる。どうして社会が保護しなければいけないのかを問う反論者がいるとすれば、私は一般功利性という理由しかあげることができない。（Mill, 1861, p.330）

つまり権利は、それを所有できるかどうかが本人の努力や運に任せられている場合に対して、人が社会に対してその所有を保護するよう求めることができるようなものなのである。そして何故保護されるべきなのかは一般功利性による、つまり保護されることによって幸福が増進されるからであるという。

これをふまえてミルは正義の観念は行為の規則とその規則を是認する感情を想定しているという。行為の規則とは先に述べた通り権利の遵守であり、これは全人類に共通し、全人類の善を目的とするものでなければならない。感情というのはこの規則を犯した者を処罰しようという欲求と、規則を犯したことによって不利益を被る（権利を侵害された）特定の人がいるという認識である。そして、この加害者を罰したいという欲求は、「自己防衛の衝動と共感の感情という二つの感情から自然発生的に出てくるものであると私には思われるし、そのどちらもきわめて自然なものであり、どちらも本能そのものか本能に似たものである。」（Mill, 1861, p.325）という。この本能（に似たもの）はどの動物も持ち合わせているような類のものであるが、人間の持つものは、共感の範囲が広い点でその他の動物と異なる。人は同胞であるすべての人間のみならず、感覚を持つあらゆる生物に対し

て共感することができる。またその知性と共感能力が結びつけられることで、自分の身近な仲間のみならず所属する国家や人類という集合的観念に自らを帰属させることができ、この集合体に危害を与えるような行動に抵抗するようになるのだという。

多くの人に正義の観念が功利と相容れない、一般功利性で権利を保護する理由として弱すぎると感じられるのは、この報復の渴望という動物的要素の強さのためであるとミルはいう。この加害者を罰したいという欲求が並外れて強く現れるのは、これが人間にとってもっとも重要な利益である安全に関わるものだからである。他のどの利益であっても、それをなしに生きていける人はいるだろうが、安全なしに生きていける人はいない。しかし、この安全は、それをもたらす仕組みが常に機能していなければ手に入れることができないので、安全な生活基盤を守るために協力しあうことを同胞に要求するときに通常の功利性の場合よりはるかに強い感情が伴う。そしてその程度の違いが種類の違いとなるのである。

この〔安全を求める〕要求は、その絶対的な性質、明白な無限性、他のあらゆる考慮と比較することの不可能性を想定しており、正・不正の感情と通常便宜・不便宜の感情を区別するものとなっている。これに関わる感情はとても強く、また私たちは(同じような利害をもっているあらゆる)他者にもそれに共鳴する感情が見出されることを強く確信しているので、「するに違いない」や「するはずだ」ということが「しなければならぬ」となり、不可欠であると認識されたものが物理的必然と同じような道徳的必然となり、しばしば拘束力の点でも物理的必然に劣らないようなものになる。(Mill, 1861, p.331)

人類が互いに危害を加えることを禁じる道徳規則は人間の福利にとって他のあらゆる格率よりも重要であるし、他人から善を受けることより害を受けないことの方がはるかに重要であるため、それら害から個人を保護する道徳は誰もがもっとも関心を持つものである。その重要さゆえにあまりにも強い感情が引き起こされるため、この程度の違いが種類の違いとして認識されてしまっているのである。この道徳を守るかどうかで人は人類という共同体の一員としてふさわしいかどうかを試され判断されるという。

正義の感情は我々に対する危害に対して適用される、知性と共感によって起こる報復や復讐という自然な感情であると思われる。したがって、正義の感情はそれ自体としては道徳的な要素を含んでいない。この感情を道徳化させるものが先述の社会的感情である。社会的感情と共感の能力によって正義の感情を社会全体やその集合利益に基づくとところに働かせることで、不正義に対する憤慨の感情ははじめて道徳的と言えるのである。

私たちは誰かに不愉快なことをされると、それがどのようなことであっても、自然な感情によって見境なく憤慨するだろうが、社会的感情によって道徳化されている場合には、自然な感情は全体の善と一致するような方向にしか作用しないからである。(Mill, 1861, p.327)

不正義に対する憤慨が道徳的感情である人は、怒りの対象に常に自分以外の人間、もしくは社会全体の不利益も含まれている。つまり道徳的であるということは、自身の利益のためだけではなく他者の利益のためにもなる規則や正義を主張するということなのである。

以上の考察から、ミルは正義を以下のように説明する。

正義とは他のどのようなものよりも種類としてはるかに重要な、したがってまた、より絶対的で定言的なある社会功利性に対する適切な名称である。したがって、社会功利性は程度も種類も異なっている感情によって当然のように保護されているだけでなく保護されなければならないものであり、その命令がより明確であるという点とその強制力がより厳格であるという点で、単に人間の快楽や利便性を促進するという考えに付随している穏健な感情とは区別されている。(Mill, 1861, p.345)

安全をはじめとする、一般功利性に基づいて守られなければならない権利を保護するものが正義の観念である。そしてその守られなければならない権利というものは人間の幸福に対して非常に重要な働きをする便宜であるために、これを損ないうる危害から守ろうとする感情が自然と生じ、強く働くのであり、正義が神聖化されるほどの強さをもつこの感情が伴うことによって正義の観念は保護されているといえる。

あらゆる正義に関する事例は便宜性に関する事例でもあるということはいままでつねに明白であった。違いは、特別な感情が前者には伴うということによって、後者と対照されるという点である。もしこの特徴的な感情が十分に説明されたとしたら、また、もしこの感情が特異な起源をもっているということ想定する必要がないとしたら、そして、もしそれが憤慨という自然な感情にすぎず、社会善が要求するものと合致する

ように仕向けられることによって道徳化されたものだとしたら、さらに、この感情が、正義の観念が当てはまるあらゆる種類の事例において存在しているだけでなく存在すべきものであるとしたら、正義の観念はもはや功利主義倫理にとっての躓きの石ではない。(Mill, 1861, p.344)

おわりに

以上のことから、「社会的功利性は程度も種類も異なっている感情によって当然のように保護されているだけでなく保護されなければならないものである。」(Mill, 1861, p.345)とミルが言うように、彼の功利主義は功利性(Utility)だけで成り立っているものではなく、様々な感情に、しかも高度に涵養された感情によって支えられていることがわかる。そしてミルが功利主義論において目指した幸福も同様に、単に量的に快楽が多い状態ではなく、高度に陶冶された生の感情によって求められる、より質の高い快楽に満ちたものであると言えるだろう。快に質を見出したことによってミルは人の感情の多様性を、ひいてはその幸福の多様性を示したのではないだろうか。

ミルが人に望んだのは、他者の指示や常識といった外的な意見にのみ従うことで誰の邪魔もしないように生きる姿ではなく、自らの意志をもって進むべき道を選び、自身で望んだ目標や幸福の達成に向かって邁進する姿である。他者の望む生き方に従っていても、本来の自分にとっての幸福は訪れないということは、ミルが自身の体験を持って学んだ教訓である。ある人の幸福は、その人自身が心から望んだものでないことありえない。そしてその幸福を見出すためには、自分が何を喜ぶのか、何を望むのかといった自身の感情や感受性と向き合い、それを育てていくほかないのである。

このように、ミルの功利主義論で目指されたのは機械的な快楽計算による「幸福」ではなく、豊かに涵養された個々人の感情を満たすような種々様々な幸福の形であることがわかった。ミルは人々にそれぞれ違う自分自身の幸福を目指すことを望み、他の誰とも違う自分だけの幸福を見出すために、そしてそれを実現するために意志や個性を育む感情の力を非常に重要視したのである。しかし、この個々の幸福を重視するミルの功利主義は、社会原理となるような規範をどのように導出するのか、またしうるのかという点はまだ明らかにできていない。また、ミルにとっての感情は非常に重要な位置を占めるタームであることは分かったが、これの指し示す意味も、もっと正確に検討する余地があるのではないかと思われる。これらのことを今後の課題として、十分に精査して明らかにしていきたい。

註

- 1 大屋雄裕によれば、ミルとベンサムは功利主義はかなり異なっており、ベンサム的な功利主義に限界と制約を設けたのがミルの功績であり、「人格」の内在的価値の重視がミルの特徴であるとする。(大屋、pp.64-78)
- 2 本稿におけるミルの引用は、原文からの直接引用し著者が翻訳したものをを用いている。
- 3 ミルの「快」概念を詳細に検討した水野俊誠によれば、ミルは精神の諸能力のうちで、見る観察力としての知覚、予測する推理力としての判断の他に、とりわけ「決定する識別力として最善のものを識別する感情と道徳的感情」を重視していた。(水野、p.63)
- 4 ミルと父との関係性は非常に特殊であり、マーサ・ヌスパウムは「ミルは父親から英才教育を受け、強烈な感情に対する父の羞恥心を共有させられて育てられた。この教育の結果ミルは徐々に、ロボットのような受け身の感覚を抱くようになり、いかなる能動的感覺も感じられなくなっていく。」(ヌスパウム、2004、p.250)と指摘し、このことがミルの青年期までの性格形成に必決して良くはない影響を多大に与えたと主張する
- 5 この「快の質」に関しては、ジョン・モーレイらは何ら矛盾を見出せないとしたものの、ジジウィックらによる「功利主義と完全に矛盾する」「快楽の全ての質は量に還元されなければならない」等の批判も存在する。(J.B.シュニーウィンド、pp.91-92) これら批判に対する回答は次回への課題としたい。
- 6 このような快の質についての考察は、アリストテレスのニコマコス倫理学を踏まえると理解がしやすい。「どのような知覚にも快楽があり、思考や観想についても同様であるが、もっとも快いのは完全な活動である」(アリストテレス、1174b)たとえば食事という行為における味覚の快にしても、ただ空腹を満たすだけの快よりも、さまざまな味の違いが分かり、それを楽しむのがより高次の快であると言える。このように理解すると、ミルのいう獣の快楽とそうでないものの差異もこれに当てはまる部分があるように思われる。

- 7 アラン・ライアンによれば、ミルは、強制の領域外にある「分別」（自己の利益への配慮）と「卓越性」（性格の美）の領域と、何らかの強制が必要な「道徳」の領域とを区別し、さらに「道徳」の領域を、死活的に重要な損害に関わる「正義」と、それ以外の一般道徳とに区別した。ライアンは、ミルが三つの領域を明確に区分したことを評価し、ミルに従えば、同性愛は不正でも不道徳でもないと論じた。（A.ライアン pp.69-73）
- 8 ミルの「完全義務」「不完全義務」の用法は、明らかにカントの「定言命法」、「仮言命法」の区別の影響を受けている。カントは、「偽りの約束をしてはならない」のような「例外を少しも認めない義務」を「完全義務」と呼び、「他人に親切にせよ」のような「広義の義務」「偶然的義務」を「不完全義務」と呼んで区別した。（カント、1785, p.266・カント、1797, p.366）参照。

参考文献

- Mill, John S., 1873, *Autobiography*, (in: John M. Robson (ed.) *Collected Works of John Stuart Mill*, 2006, Liberty Fund)
- Mill, John S., 1867, *Inaugural Address delivered to the University of St. Andrews*, BiblioBazaar
- Mill, John S., 1859, *On Liberty*, (in: *John Gray (ed.) On Liberty and Other Essays*, 1998, Oxford U.P..)
- Mill, John S., 1861, *Utilitarianism*, (in: *John Gray (ed.) On Liberty and Other Essays*, 1998, Oxford U.P..)
- A.ライアン「J.S.ミルのく生活の技術」『ミル『自由論』再読』J.グレイ・G.W/スミス編著、木鐸社、2000
- J.B.シュニーウィンド「ミルの『功利主義論』に対する1861年から76年にかけての諸批判」『ミル記念論集』J.M.ロブソン・M.レーン編、木鐸社、1979
- アリストテレス「ニコマコス倫理学」『アリストテレス全集13』加藤信朗、岩波書店、1973
- カント「人倫形而上学の基礎付け」1785、『世界の名著39・カント』中央公論社、1972
- カント「人倫の形而上学」1797、『世界の名著39・カント』中央公論社、1972
- マーサ・ヌスバウム『感情と法』河野哲也訳、慶應義塾大学出版会、2010
- 大屋雄裕「功利主義と法—統治手段の相互関係」『功利主義ルネッサンス—統治の哲学として—法哲学年報2011』日本法哲学会編、有斐閣、2012
- 小泉仰『イギリス思想叢書シリーズ10 J.S.ミル』研究社、1997
- 水野俊誠『J.S.ミルの幸福論—快樂主義の可能性』粹出版、2014